

一 六条わたりの御忍びありきの頃、
内裏うちよりまかで給二ふ中宿なかやどりに、大式三の
乳母めのといたく煩わづらひて尼四になりにける、
とぶらはんとて、五条なる家尋ねて
おはしたり。御車入るべき門かどは鎖さし
たりければ、人して惟光これみつ召よさせて、
待たせ給ひけるほど、むつかしげな
る大路おほぢのさまを見渡し給へるに、こ
の家のかたはらに、檜垣ひがきといふもの
新しうして、上うへは半蒔はじとみ四五間まばかり
あげ渡して、簾すだれなどもいと白う涼し

通釈 (源氏の) 六条あたりの御忍び通いの頃、宮中から
退出なさる道の途中の休み所として、大式の乳母〔源氏の乳
母〕がひどく病んで尼になってしまったのを見舞おうと、
(源氏は) 五条にある(その) 家を訪ねておいでになる。(源
氏の) 御車を入れるべき門は閉してあったので、人〔従者〕
をやって、惟光をお呼ばせになって、お待ちになった間、(源
氏が) むさくるしい大通りの様子を見渡していらっしやる
と、この(大式の乳母の) 家の傍に、檜垣という垣を新しく
作って、上部は半蒔を四五間ほどずっとあげて、(半蒔を掲
げた所に懸けてある) 簾なども、大そう白く涼しそうに見え
るその簾ごしに、うつくしい額の様子の(女たちの) 透いて
見える人影が、たくさん見えて、(こちらを) のぞいている。
ぶらぶら立ち歩いているのであろう(その女たちの額から)
下の方を想像すると、むやみに背が高いような気がする。(源
氏は) どんな女たちが集っているのであらうと、風変りにお
思ひになる。御車もひどく目立たぬようになさっている。先
払いも追わせなさらないので、(源氏は人が自分を) 誰と気